明恵門下における『即身成仏義』解釈

——高信撰『六大無碍義抄』上巻翻刻——

野呂靖

はじめに

鎌倉時代初期に高山寺を中心に活躍した学僧明恵房高弁（一一七三～一二三二、以下明恵と略記）には、数多くの門弟が随侍していたことが知られている。[1] 順性房高信（一一九三～一二六四、以下高信と略記）は、こうした門下の学僧中にあって、『高山寺明恵上人行状』『明恵上人和歌集』などの伝記資料の作成とともに、『解脱門義聴集記』『光明真言句義釈聴集記』といった明恵生前の講説に基づいた「聞書」を編纂するなど師説の継承に尽力した学僧である。この高信自らの撰述にかかる著作に、空海撰『即身成仏義』（以下『即身義』と略記）の注釈書『六大無碍義抄』（以下『義抄』と略記）二巻が存在する。

従来、高信が関わった著述としては、多くの聞書類の存在が知られていたが、本書は数少ない明恵門下における密教理解を知る上で極めて重要と考えられる。また、明恵の思想の特色に密教義と華厳教義との一致が指摘されてきたが、[2] 本書においても華厳宗諸師の教学が多く依用されており、高山寺系統における独自な密教理解として注目される。本書は現在未翻刻の資料であり、高信の事績を整理した納富常天氏によって早くよりその存在が指摘されてきたものの、[3] 書誌内容や思想的特徴など立ち入った検討は行なわれてこなかった。[4]

筆者は以前、新義真言教学における『義抄』の受容について若干の考察を加えたことがあるが[5]、その際、『義抄』自体の内容については触れることができなかった。本稿では、『義抄』（上巻部分）について翻刻し、合わせて本書の内容紹介を行なうことで、明恵門下における『即身成仏義』解釈の一端を明らかにしたい。

一　書誌概略と成立背景

まず、『義抄』の書誌についてその概要を述べたい。納富常天氏は、『高山寺代々記』に、「高信。元行澄後改今名順性房。（中略）丹波神尾中興開山。著述六大無礙義抄上下二巻、密一事一巻、入我我入申一巻[6]」と記されていることに注目し、高信には『義抄』の著述があったことを指摘しているが、「いまは所在不明」とされている[7]。

ところが、『国書総目録』には『六大無碍義抄』の具名については記載がないものの、『即身義六大無礙義鈔』と題された文献について、「即身義六大無礙義鈔二巻二冊、又名六大無碍義抄、京大（高山寺蔵本写）・真福寺（下巻、康元二写一軸、紙背蓮華喩讃品第七経巻第五）」とあり、二本の写本の存在を知ることができる。さらに『高山寺経蔵典籍文書目録』には「高山寺聖教類第二部二四、六大無碍義抄巻上・下二帖」（一八四頁上・下）とあり、これによって『義抄』には①高山寺蔵本、②京都大学附属図書館蔵本、③真福寺蔵本の三種の写本が確認できるのである。筆者はこのうち①については未見であるが、②③の諸本について、実際に閲覧調査する機会を得た。

まず、①高山寺蔵本であるが、『高山寺経蔵典籍文書目録』に拠れば鎌倉後期写の二帖本（粘葉装）であり、本紙に高山寺「密蔵院」の墨印、及び仁和寺「心蓮院」の朱印が押され、鎌倉後期の訓点が施されている。下巻

末奥書には、

寛元五年〈丁未〉二月二日子尅於高山寺東谷禅庵依一人之懇情卒爾草之畢　東谷隠侶高信
元是假名也彼草於高山寺林師令（義林房喜海事也）一見賜了其後依同侶勧進成真畢矣
建長四年〈壬子〉二月廿八日於丹州神尾山北谷草室聊加點畢遂可再治之也矣　山中非人高信
此抄上下明恵上人弟子作也〈神尾中興開山号順性〉

とあることから、本書は明恵没後十五年目にあたる寛元五（一二四七）年二月に高山寺東谷において撰述された後、同門の先輩にあたる義林房喜海（林師、一一七八～一二五〇）の閲覧を経て、建長四（一二五二）年に丹州神尾山寺において再治されたことが判る。寛元五年は、嘉禎二（一二三六）年より始まった『解脱門義聴集記』の編纂より約十年後に当たり、以降展開される種々の明恵講説類集活動の初期に位置している。[8] 高信は、寛喜四（一二三二）年の明恵臨終時に際しても侍しておらず、この頃より既に高山寺を離れ、丹州神尾山寺に別所を設けていたことが知られるが、[9]『解脱門義聴集記』の編纂にあたっては両所を往復しており、本書の撰述は喜海など高山寺を継承した明恵門下の学僧との交渉を背景として成立したといえよう。

次に②京都大学附属図書館蔵本は、「大正十四年一月二十九日」の蔵書印を有し、料紙・筆体等の特徴より近代に入っての書写本と推測されるが、書写年次については未詳である。ただし、上巻一紙目に「高山寺本密蔵院本」と墨書され、さらに①高山寺蔵本と同一の奥書を有していることから、①を底本としていることが判る。[10]

最後に③真福寺蔵本は、尾張の真福寺宝生院大須文庫所蔵の一本であり、下巻のみ伝存している。[11] 本文は京大本と僅かな文字の異同を除いて同一である。下巻末には、高山寺本と同一の本奥書の後に、

建長四年卯月十七日、於神護寺地蔵院写之。此書順正御房被選出。即身成仏趣同宗无委建立。以先宗為其教相花厶宗教相可為地盤被戴彼宗義尤至要、、。愚僧閉眼之後彼本房信恵御房可送之。　金剛資隆詮記之

康元二年二月十八日、於高野山禅定院申請僧都御房御本写之。雖為他宗人之製作真言宗義誠有味矣。愚僧殊才心々々。就中被覧此書不知作者。残不審此処夢中有僧告云明恵上人之弟子造〈云々〉弥感心々々矣。

求菩提沙門豪信入寺〈生年三二〉　　同二三日未刻移点畢

との識語を有する。[12] ここで注目されるのは、第一に新義真言教学の大成者として知られる中性院頼瑜（豪信、一〇九五～一一四三）が康元二（一二五七）年二月十八日に本書を書写している点である。[13] ただし、筆体等から頼瑜自筆本とは考えがたく、おそらく後代の書写と思われる。第二に、「隆詮」なる僧による「愚僧閉眼之後彼本房信恵御房可レ送レ之」との本奥書にある「信恵御房」とは、『明恵上人伝拾遺記』裏表紙に「神尾寺信恵房弁深」（明恵上人資料一、六一三頁）とある高信門下の「信恵房」と考えられることから、本写本は建長四年の再治後、同年四月に神護寺地蔵院において隆詮が書写し、さらに神尾山寺の信恵を経て頼瑜へと伝持されたことが推定される。

以上の検討より、現存する三種の『義抄』書写本はいずれも高山寺本の底本となった祖本より、神護寺を経て新義真言宗系に伝存した真福寺本と、高山寺本を底本とした京大本との二種の系統とみることができよう。

二　『六大無碍義抄』の教学的特色

（1）『六大無碍義抄』の構成と内容

本書は上下二巻本であり、いずれも問答体によって注釈が施されている。まず上巻では冒頭に「六大無碍常瑜伽…」等の所謂「二頌八句の偈頌」を示した後、各句それぞれについての逐語的な注釈が行われ、下巻では上巻における注釈に基づいた、即身成仏に関する派生的な疑難が全二三問答にわたって展開されている。このうち、最も中心的に論じられるのが、末世の凡夫においては現身一生による即身成仏は不可能ではないかとの疑難であり、高信はこうした見解を批判することで、むしろ「末代小国」の者にこそ三密行の有効性が存することを主張している。[14] ただし、『義抄』では「成二此等義一事誠為二管見一不レ見二儀軌本経之説相自宗他宗之解釈一（中略）是偏為二愚昧初心者一示二修行用心一故也」（京大本、上巻一四左―一五右）と述べるように、必ずしも詳細な教義解釈に立ち入る訳ではない。本書が当初は仮名文字によって撰述されていたという事情からも（下巻末奥書）、本書はあくまで「初心の真言行者」を対象として、即身成仏の有意性を達意的に示す点に特徴が認められよう。

（2）『六大無碍義抄』所引の諸師と文献

次に、『義抄』の思想的特徴を引用文献より確認したい。

［図表］『六大無碍義抄』所引の諸師と文献

人物	文献
空海	『即身成仏義』（一六）『秘蔵記』（九）『十住心論』（一）［『異本即身成仏義』（一五）］
覚鑁	『心月輪秘釈』（一）
円仁	「慈覚大師釈」（一）
真済	『高雄口決』（一）
	『大日経』（二）『大日経疏』（七）／『仁王般若陀羅尼秘釈』（一）／『宝楼閣経』（一）
明恵	「先師上人云」「先師和尚云」「和尚云」（四）
智儼	『孔目章』（一）
宗密	「圭山大師云」（一）
李通玄	『十明論』「華厳李長者云」（二）
	『華厳経』（一）「有人云」「古云」（三）

まず、『即身成仏義』の引用が一六例と最も多い。これは『義抄』が本書の注釈という点からも当然ではあるが、実際に『即身義』の語句を注するにあたっては、主に空海仮託の『異本即身成仏義』に基づいている。[15] また、ここで注目されるのは、第一に天台密教からは円仁（七九四～八六四）撰『蘇悉地経疏』が「唯理秘密・事理倶密」釈について引用されるとともに、[16] 真言密教系統からは覚鑁（一〇九五～一一四三）撰『心月輪秘釈』が六大の形色に関する箇所に依用されていることである。[17] 既に指摘されるように、明恵は覚鑁門下の融源作『阿字観』を筆写・加筆しており、[18] 大伝法院方にあたる高野山月上院所蔵の聖教類についても高山寺に多く流入している。[19] 『義抄』におけるこうした引用例は、高山寺と同様に仁和寺別所であった高野山伝法院との交流を背景としたも

のと考えられ、高山寺における密教学の系統を知る上で極めて重要であろう。

第二に、本書の最大の特色といえるのが華厳学文献の引用である。まず、智儼の『孔目章』及び宗密の『円覚経大疏』は、それぞれ五種成仏説[20]、六種成仏説[21]が、顕教における現身成仏の用例として用いられる。また、李通玄（六三五～七三〇）については『解迷顕智成悲十明論』より初発心の解釈について引用され[22]、「甚有レ味学者留レ意」として高く評価されている。このように『義抄』では、宗密・李通玄といった明恵が晩年に思想的に依拠した諸師が積極的に依用される一方、法蔵（六四三～七一二）・澄観（七三八～八三九）の解釈については一例も用いられていない点が注意される。

ところで、『義抄』には「先師上人云」「和尚云」として明恵説を引用する場合[23]の他に、典拠を明記することなく『解脱門義聴集記』の明恵口説の箇所を「転用」している例が存在する[24]。『解脱門義聴集記』は、『義抄』撰述と同年の宝治一年（同年二月改元）五月十日にその編纂作業を終了していることから[25]、『義抄』の撰述と並行的に著述されていたことになる。『義抄』撰述にあたっては、こうした自らの編纂にかかわる聞書をいわば下敷きとすることで形成されていると考えられる[26]。

（3）『六大無碍義抄』における高信の顕密観

上述の検討により、『義抄』には明恵説からの影響を強く窺うことができるといってよいであろう。それでは高信は如何なる場合も明恵説を尊重するとみてよいのであろうか。ここでは、従来より明恵教学の特色の一つと考えられてきた顕密観に注目し、高信の見解を確認したい。

まず、高信の基本的な顕密観として注目されるのは、「離二顕家之名義一独云二何立一真言之法相一」（京大本、上巻一四左）「汝離二顕宗所談事理等法相一、欲レ談二真言一宗之事理一。苑如二離レ米求レ飯愚昧之甚也」（京大本、上

巻一〇左）とされるように、真言密教において説かれる事理の法相自体は、顕教を離れては成立し得ないとしている点である。この点から『義抄』では、「我宗（真言宗）ニ不ニ委釈一譲ニ先宗（華厳宗）之義一也」（京大本、上巻一四丁左）と述べられて、華厳教義が積極的に援用されることになる。[27] しかしながら、ここで注意したいのは、高信においては、このことが直ちに華厳教義と密教義との一致に結びついていない点である。

すなわち『義抄』では即身成仏に関して次のように「顕密対弁」が行われているが、

> 慈覚第四釈云、天台華厳唯理秘密、大日教至ニ事理倶密一〈云々〉。是又如レ此。理秘密雖レ通ニ天台華厳一唯理秘密義。於ニ身語ニ業之事秘密一者、諸教不レ談レ之明矣。（中略）但雖ニ謂天台華厳唯理秘密釈一約ニ華厳本宗法界縁起、大陀羅尼門、事事相即、一多無碍等義一是宗家之盛談也。故判ニ華厳一為ニ事一乗、一雖レ然彼於ニ法界縁起具徳一約ニ智入之照見一成ニ事事相即談一也。（中略）三密相応等義、諸教成仏門之中即所レ不レ見也。然真言教雖レ謂ニ事理倶密一事秘密是諸教超勝義也。（京大本、下巻一七左）

ここでは円仁の『蘇悉地経疏』における顕密二教判が言及されるものの、華厳教義は「唯理秘密」ではなく、「事事相即」を説く「事一乗」として高い評価を与えられている点が注目される。しかしながら、最終的には三密行を説くことのない顕教は「事秘密」たる密教とは隔絶したものとして低く位置づけられているのである。

一方、明恵は顕密二教における即身成仏の可否について次のように述べている。[28]

> 一即身成仏事。真言教ニハ「身結レ印、語誦ニ秘密言一、心称ニ実相一時、即身不レ離ニ語意一、語不レ離ニ身意一、意不レ離ニ身語一、三密平等、平等周ニ遍法界一位」ヲ云也。顕宗ニハ心称レ理位ニ現身成仏ノ益ヲ得タリ。『即身

成仏義』中「於二諸教中一闕而不レ書」ト云ハ三乗教ヲ指ス也。此ハ顕中ノ顕、此ヲ正ク顕教ト云ルル顕ニテハアル。一乗教ハ顕中ノ密教也。サレハ此教中ニハ即身成仏ノ義不レ説トハ不レ可レ云也。三僧祇ヲ経テ成仏スト説ハ即三乗教ノ意也。（『栂尾御物語』上、『明恵上人資料』三、三八七頁）

すなわち、「即身成仏」とは真言教では身・語・意の三密が平等にして法界に遍満する位をいうが、顕宗においても同様に、一乗教は現身成仏（即身成仏）を論じているというのである。ここで注意したいのは三乗教が「顕中の顕」とされ、一乗教が「顕中の密」と表現されていることである。

つまり明恵は、空海が『即身成仏義』において「即身成仏」の義は「諸教には闕して書せず」と述べているのは、密教に対する顕教全般を指しているのではなく、むしろ三乗教のみを指すのであって、顕教中の密意を説く一乗教は「即身成仏」を論じているとみている。

この点について、高信は『義抄』下巻において顕教の一乗教における初発心成仏と即身成仏とは如何なる差異があるかと設問し、明恵と同様に「闕不書」を引用するものの、あくまで三密加持を説かない点で一乗教の成仏説とは異なると否定する。

問。顕家一乗等意、雖レ云二初発心時便成正覚一、而還立二後位修行一。今又得二薩埵位一、後有レ得二五神通漸次勝進等義一者、与二彼義一有二何差異一乎。答。自レ元我所二成立一、以二法仏三密加持父母所生三業一成二如来三秘密門一云二即身義一也。（中略）謂顕家一乗信位終心、摂二三賢十地行一。彼約レ智談レ之也。未レ云二三密加持速疾顕一。故父母所生身、速証大覚位義、実闕所レ不レ書也。（京大本、下巻一六右～一七右）

ところで『義抄』では、即身成仏の「一生・隔生」の論義に言及している箇所があり注目される。

或云、従レ凡入二仏位一、或云二後十六生成正覚等一、毎臨二此等文一起二上一一疑問一、其証拠汝等見二所勘文一、配当不レ違、縦雖三機分二大小二機一、於二其大小機中一、又有二数重重一、大機一生即身頓証可レ為二機熟上根之者一。若如レ此者、小乗教前釈迦菩薩以二悉達太子父母所生身一、直成二覚道一有二放光動地之瑞一、以可レ言二即身成仏一乎。汝上根上智大機之人全不レ嫌二前世機熟一。汝所レ出小機人、若経二生生一於二後後生一定云二大機即身成仏一。若爾顕家三僧祇後成仏義有二何差異一乎。為レ通二此等難一当代学窓其諍盛也。世世生生以来、於二顕密二道一不レ成二一分値遇一、衆生、始遇二此教一可二即身成仏一也。所以何者、顕宗龍女善財等現身成仏依二前世見聞生一云故、我宗不レ然、一生一身可二成仏一故。若謂三前世有二成仏業因一、何別二顕宗一乎。（京大本、下巻一九左～二〇右）

ここでは、顕教における龍女成仏・善財童子の「現身成仏」は、あくまで前世の「見聞生」における業因に基づくものであり、一生一身ではないと厳しく批判している。このことから、「隔生説」の立場に基づけば「顕家」と同じることになるとするのである。

高信は明恵の聞書や伝記を整理・編纂するなど喜海に次いで重要な門下の一人であるが、重要な点で師説とやや異なった見解がみられる。高信は真言宗については「我宗」と述べており、華厳と密教との一致という点については立ち入ることはない。明恵の密教学理解が門下において如何に継承されたかという点については、より慎重な検討が必要であろう。

三　結　語

以上、極めて簡略であったが、『義抄』の書誌について紹介し、教学的性格について若干の指摘を行った。

高信の『即身成仏義』解釈には、円仁、覚鑁など東台両密の影響とともに、「我宗不二委釈一譲二先宗之義一也」とする基本的立場から華厳宗諸師の文献が援用され、直接的には明恵の聞書である『解脱門義聴集記』から転用される箇所があるなど、明恵教学の多大な影響を窺うことができる。しかし一方で、顕密理解にみられるように高信においては「真言宗僧」としての立場からあくまで密教説の優位が主張されていた。

本書ではこの他にも、六大に関する解釈や三種即身成仏義、また華厳の四種法界説と真言教義との同異など、重要な見解が示されている。本書を含め、明恵門下における著作については、未だ十分な検討がなされていないのが現状であり、明恵や道範（一一七八?～一二五二）など同時代の真言宗僧との詳細な比較は必須であろう。これらの点は今後の課題としたい。

［附記］本稿は平成十七年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。／各写本の調査に当り、貴重な資料を閲覧させてくださった真福寺・京都大学附属図書館のご厚意に対し衷心より感謝を申し上げます。

【附】京都大学附属図書館蔵『六大無碍義抄』上巻翻刻

【凡例】

1、本翻刻は、高山寺本を底本とする京都大学附属図書館蔵本に基づいたものである。本来ならば、上巻の伝存する高山

寺本との詳細な対校が必要であるが、この点は今後の課題である。

2、改行については、京都大学附属図書館蔵本にしばしば文字の挿入がみられることや、紙幅の都合の点から、原則として本文通りの改行とせず、追い込みとした。但し、本文に付された意図的と考えられる改行箇所については（」）で示した。

3、「碍」字は本文中では「碍―石」であるが、「碍」字とした。

4、判読不能の文字については、□により字数分の空格を示した。また原文の誤写と思われる文字についてはそのまま翻刻し、［　］内に推定される字を記した。

5、本文中に使用されている旧漢字に関しては、内容に抵触しない限りにおいて新字体に改めた。

6、本文に付された読点については原文通りとした。但し、返点・仮名点については省略した。

7、割注に関しては〈　〉で括った。また紙数を（　）内に表記した。

8、引用典籍が判明した箇所については、［　］内に記した（『大正新脩大蔵経』＝「大正」、『弘法大師全集』＝「弘全」と略記）。

（一右）

六大無碍義抄巻上

六大無碍常瑜伽〈体〉四種曼荼各不離〈相〉
三密加持速疾顕〈用〉重重帝網名即身〈无碍〉
法然具足薩般若　心数心王過刹塵
各具五智无際智　円鏡力故実覚智〈成仏〉

即身成仏義釈云〈本法〉［弘全一、五一七～五一八頁］、此二頌八句以歎即身成仏四字、即是四字含无辺義、一切仏法不出此一句、故略樹両頌顕无辺徳、頌文分二、初一頌歎即身二字、次一頌歎成仏両字、初中又四、初一句体、二相、三用四无

礙、後頌中有四、初擧法仏成仏、次表无数、三顯

（一左）

輪円、後出所由、〈文〉」即身成仏義云、〈理具、加持、顯得〉［異本④弘全四、三七頁］問云、理具乃至顯得即身成仏意云何、答、一切衆生自心中金剛胎蔵曼荼羅遠離因果、法然具名理具即身成仏也、由三密加持身本有三部諸尊速疾顯発、故云加持即身成仏也、三密修行已成就故、即心具萬行見心等正覚証心大涅槃、発起心方便厳浄心仏国、従因至果以無所住住於其心、如実覚知名顯得即身成仏也〈文〉」又云［異本④弘全四、三八頁］、問、以此六大無碍頌相配三種即身成仏如何、

（二右）

答、依頌初四句立加持即身成仏、依次三句立理具即身成仏、依終句立顯得即身成仏〈取意〉、二頌八句之文、両本即身成仏義之惣科、大旨如此、次正可注釈頌文、」六大無碍常瑜伽〈文〉」問、其六大名字如何、答、地水火風空識是也、問、其六大義如何、答、雖有諸文、且大日経云［巻二、大正一八、九頁中］、我覚本不生、出過語言道、諸過得解脱、遠離於因縁、知空等虚空〈文〉、是其義也、以今此五句、配六大種子者我覚者識大也、因位名識果位謂智、智者即覚也、梵音

（二左）

𑖪𑖽𑖨者、𑖪𑖽即覚、𑖨𑖽即智也、𑖪𑖽𑖨𑖽是少異名也、諸経中𑖨𑖽𑖨𑖽者、古翻遍知新譯等覚、覚与智義相渉故、此経號識為覚、因果之別、本末之異而已〈云云〉、次本不生者、𑖨字本不生義、即是地大也、出過語言道者、𑖨字自性離言説、即水大義也、諸過得解脱者、𑖪字清浄无垢染、是火大義也、遠離於因縁者、𑖦字因業不可得、是風大義也、知空等虚空者𑖨字等空不可得、是空大義也、問、何故此六言六大耶、答、此六能生一切諸仏及一切衆生器界等大通情非情故云六大也、問、其六大形色如何、答、地

（三右）

方形黄色、水円形白色、火三角形赤色、風半月形黒色、空圓形青色也、於識大形色有無且有二意、一於識不立形色是顯密常途之説相也、或由秘宗可存形色歟、覚𑖨上人心月輪秘釈引経云［大正七九］、心即月者、以心為白色円形也〈云云〉、此義又非無所由、又別本即身義云［異本①弘全四、八頁］、問、若尓心之体者、何体何相似耶、答、体潔白之体也、形相如

満月〈云云〉、思之、問、両部大法何不説六大観唯言五大観耶、答、是又可有二義、一既心月輪、上安布五大、故月輪是五大所依故、摂能依五大別不開之、例如於四印会而別不立大日、是依四

（三左）

仏即大日故也、或五大一一不生即是可為我覚義、一一五大是所不生法、能覚即是不生智、故別不開識大歟、誠証更勘之、問、何故以𑖪𑖿𑖨𑖽𑖭之本不生離言絶等字義配五大義耶、答、雖梵語輙難述其義地水火風空是堅湿煖動等義也、法本不生性更無法而可壊之故、𑖪字不生義堅中之堅故即為地義、以言説義為水大者、世間煖語猶有愛潤之功、況法水能潤益衆生故為水大、𑖨字智火義、焼尽煩悩薪故、其義可知、𑖽字因業義、為風大者、風大有成熟之功因業成就果故也、𑖭字等空義、如文易知、

（四右）

〈本説更勘〉、問、今此諸法本不生、自性離言説等五大字義為就仏五大説之、将可云通衆生五大耶、答、其義〈云云〉、凡五大観義其不一図、或観五大空義、或説五大不空義、或可有空有無碍等義、先𑖪𑖿𑖨𑖽𑖭五字義、是五大故、通一切法応有之、即至地獄餓鬼等五大所成故、若以此五大観寄於地獄可為地獄観、先𑖪字本不生者、於地獄即有不生義、次𑖿字言説義有地獄等名言、可知、次𑖨字塵染義上上品貪瞋癡等、次𑖽字因業義即地獄業因、十悪五逆等也、次𑖭字等空義、地獄等報皆是因縁無性為空義、付此字

（四左）

相言𑖪字本不生、言説不可得、塵染不可得、因業不可得、等空不可得、地獄果報乃至其名字、諸煩悩十悪業等、悉観不可得、地獄既空也、地獄等既空、何法空之、故云空又不可得也、約此義五大悉不生故、六趣四生等因果終不可得也、是就五大空之義辺成於観想也、次𑖪字本不生性為菩提心大地、大地必有湿性、従此本不生大地生大悲湿性水、従此大悲湿潤𑖿字門万徳由生、其性本自清浄離諸塵染是𑖨字智火也、以上本不生相応之悲智、所成諸行大般涅槃因業也、是即為𑖽字門風大義、此業悉帰大空性

（五右）

故一切諸法有無□碍、性相清浄、萬性皆備、故悲智萬行同於法界、平等平等為[梵字]字等空義〈已上所口□、更問〉、大日経疏云［巻一、大正三九、五八七頁上］、隨行者以無住心所修萬行、即由大悲地界所執持故、大悲火界所湿育故、大悲水界所滋潤故、大悲風界所開発生故、大悲虚空不障碍故、尓時無量度門任運開発、由芽茎枝葉次第荘厳、即是於一切心法、具足因縁之義也〈云云〉、此則言行者以一花一香奉供養仏時、以遍一切処浄菩提心、興供養雲海、普作仏事発起悲願、廻向群生一切抜苦与楽以自善根力、如来加持力、法界力故、所為妙業皆得

（五左）

成就之次此文末也、随行者以無住心、所修萬行者、若行者有住着等心、不可発遍一切処浄菩提心、若不発此心我法二執前何一花一香普作仏事乎、行者有無住心故〈以我功徳力〉、如来大悲地界等所執持也、即依有如来大悲之加持故、行者以[梵字][梵字][梵字][梵字]等五字之言、安布自身、以仏之五大荘身也〈如来加持力〉、五大事相是事法界、五大不生性理法界、此事此理無碍故、事理無碍法界、故一花一香遍法界、無碍自在普作仏事、是事事無碍法界也〈法界力〉、」又秘蔵記云［弘全二、一一頁］、腰下念[梵字]字、是地輪黄色臍念[梵字]字

（六右）

水輪白色胸念[梵字]字日輪赤色、髪際念[梵字]字、風輪黒色、頂上念[梵字]字虚空青色、又五色光具足、所謂五大者地水火風空也、阿字是本不生理種子、落種子於地輪則待水土縁始芽、是故有水輪、雖有水土縁必待日輪暖氣得具根茎葉、是故上有日輪、雖有水土日輪縁必待風力得具生長、是故有風輪、雖有水土日風、而皆悉堅実何能生物、是故最上有虚空、所謂五字厳身也〈云云〉、當知五大若闕一種諸法即不可成也、上疏一切心法具足因縁等之義可知、是等義文直以仏五大厳於行者心身也、故五大悉成不空

（六左）

徳也、次空不空無碍義者、於我等血肉五大不生之処、即可有観本尊五大之義、即身義云〈理具、加持〉［異本③弘全四、二〇頁・異本④同、三九～四〇頁・異本⑤同、六二頁］、問、是血肉之身六大煩悩身六大故、不名仏六大耶、答、此煩悩中身之六大是如来之六大之種子字、字相字義故、尚是名仏身六大等〈云云〉、意於衆生血肉之地水火風空識六大、一一観

不生義即自身六大而見仏身六大也、自身地水火風等名言即為如来六大之種子、其方円三角等形即字相、其一一不生即字義也、故於衆生血肉之六大一一不生処反見仏身六大、何以故、仏之六大全不生性起故、於衆生之六大

（七右）

不生処即見仏身不空之六大也、然則如上諸義随義便、或観空或観不空或観空不空無碍等義也、偏執一隅莫濫諸門〈更問〉、問、仏之六大細也大也、衆生六大麁也小也、既六大所成之身有麁細大小、能生六大亦可有因果麁細等別耶、如何、答、不尓也、設雖麁細大小有差約実皆為堅湿煖動等義也、此堅湿煖動等六大悉不生為体故、全是不生之堅湿煖動也、染浄諸法悉具堅湿煖動之義、故指此六大法為法界体性、堅湿煖動等義為諸法能造眼前易知、法界体性義者、約事即事法界体、約性即理法界、若六大

（七左）

無者、如何顕不生真理、若不生理無者如何成六大故有不生理即六大六大法即不生理等義、是事理無碍法界、六大互無碍自在是事事無碍法界也、故麁細大小之差約所成法、於能造六大更不可有因果等別矣、問、既於所成法許有麁細大小差、終尚望所成法六大可有主伴依正等差別如何、答、挙六大所成之一法為主之時、餘即成伴成正成依、雖有互相主伴具足依正無碍等義於能造六大非有主伴依正等差異也、問、設雖無能造六大差異終成差別法故成麁細等法以為本、将顕同一不生義為本、如何、答、

（八右）

六大悉同一不生而不壊因果二位分齊、其品品位位有差別也、二義何廃耶思之、問、以六大為人為法、答、為人為法也、問、六大能成仏依正生凡依正、此能造六大是為有為為無為、答、随能見人意取之、故依機根欲楽所示現也、問、能造六大造仏之時、不成凡生凡之時不成仏耶、答、於同一性六大成立逆順体用同時無碍等義也〈已上六大義畢〉、次無碍者其義如何、答、渉入自在義也、彼入此此入彼自在無碍等也、問、今無碍者為六大互無碍乃至為生仏等六大無碍、如何、答、其義〈云云〉〈如下成〉、問色心既異生仏遙別、何以

（八左）

知無碍耶、答、即身義云〈本法〉［弘全一、五一一・五一二頁］、諸顕教中以四大等為非情、密教則説此為如来三昧耶身、四大等不離心大、心色雖異其性即同、色即心心即色無障無碍、智即境境即智、智即理理即智無碍自在、雖有能所二生都絶能所、法尓道理有何造作、能所等名皆是密號、執常途淺略義不可作種種戯論、如是六大法界体性所成之身、無障無礙互相渉入相応、常住不変同住実際、故頌曰六大無碍常瑜伽〈云云〉、色心雖異其性即同者、謂色心以何為性、以不生為性故云其性即同也、不生者、即𑖀字不生義也、大日経疏云［巻七、大正三九、六四九頁中］、𑖀字

（九右）

自有三義、有義無義不生義〈云云〉〈取意〉、不生義是中道之義也、若汝如情所謂之有色心終異云何渉入、若又言色心無何物融入、如有𑖀字三義於色心等諸法、又有有義有無義有不生義也、有故常雖差別空故常一味也、不生者常具此空有義、此有此空空有有空具不生性故、色心雖異常無障無碍〈其義如裏図之〉、智即境境即智者、此又如上六大無碍義也、且先以五大為境以識大為心、識者覚也、覚者即智、智入境悉平等也、理即智智即理無碍自在者、又六大一一不生性是理、六大一一不生是智也、理智不二無碍自在

（九左）

等義可知、於諸法准知之。雖有能所二生都絶能所法尓道理有何造作者、上以六大為能生以四法身三世間為所生〈云云〉、而約法本何前何後誰能造誰所生法乎、此是法然法尓不思議因縁所成也、何有能造所造之別乎、然則如来自証法体非仏自作非餘天人等所作、諸法法尓如是故云雖有能所二生都絶能所也、能所等名皆是密號者、密號義学者異義〈云云〉、今且能所等之一一文一一義、皆是如来密號也、謂若諸如来出現、若諸如来不出現能所等名言、諸法法尓如是、於此一一字門亦普具足一切

（一〇右）

語言法尓常住也、此一平等語即真言、真言即是如来法曼荼羅身也、二乗凡夫等不能解此秘密言語故為密号也、或云、如来引汝欲令見此不思議法尓之性徳大悲無休立能所等名言引入仏境界甚深法也、故皆是密号者密於法尓道理立能所品之名云密也矣、上四大等不離心大等者、成六大互無碍義、何以故、色心雖異其性即同、色即心心即色等云故、是成六大互無碍義也、

次如是六大所成之無障無碍等者〈云云〉、六大所成之身、生仏等無碍義、常住不変同住実際者、此六大所成之身十界悉常住

（一〇左）

不変化、同云住真如実際也、有人云、以真如実際等、為本者顕宗之談也、真言意与彼可別、如何、答、大小権実顕密二道、非必一一法相終皆有差別、依同又不可云無其勝劣、汝離顕宗所談事理等法相、欲談真言一宗之事理、苑如離米求飯愚昧之甚也、真如有種種名、先依顕宗意衆生本源故云心地、諸仏所得故云菩提、交徹融摂故云法界、寂静常楽故云涅槃、不濁不漏、故云清浄不妄不変故云真如、離過絶非故云仏性、護善遮悪故云惣持、隠覆含蔵故云如来蔵、乃至無倒所縁故云実際、真言家之義、同用此

（一一右）

等名言皆又有由也、今此実際者、即十界悉相応渉入常住不変同住真如実際故云実際即是無倒所縁義也、凡法相廃詮談旨、三論八不中道、天台一心三観、華厳果性不可説、真言三密平等平等之義皆是雖為絶離之境界、借小乗三乗等名言云一心云六大也、故語雖有我等機縁中之説、意欲捜果海離言之境界也、而汝唯執顕密二道之差異、不知有或同或異之義深察之矣、問、汝能成六大与汝所成諸根同時具足相応耶、如何、答、尓也、問、本尊六大亦尓耶、答、本也、問、本尊能造六大与汝所造六大、又為同

（一一左）

時耶、答、尓也、問、此六大汝与本尊唯為一種為多種耶、答、約能造六大唯一種、約六大麁細之差別無尽無尽、故本尊及一切衆生、重重無尽有一多無碍等義也、約同一六大而雖無差別無碍凡聖有別又約麁細等異門雖有重重無尽差別同一六大故同時渉入也、問、非本尊与我身之無碍、本尊諸根無碍、我身諸根無碍、乃至本尊与我身又無碍重重無尽耶、答、尓也、汝眼耳鼻等収尽汝全身、又一一眼耳等同時頓入眼入耳等、故一一眼耳等諸根中有無辺之汝身重重無尽、何以故、離汝一一能生六大

（一二右）

之不生無別六大故、見汝所成眼耳等諸根至一一諸根一一毛孔皆是不生為体也、故眼耳等支節中示現無辺之汝身、本尊諸根亦復如此、又本尊与我身重重無尽如因陀羅網故、汝眼収尽汝身乃至手印収尽汝身、一切手印語意等亦如此、此故純印純語純意等、又此諸根等互純互雑、本尊諸根三業亦如此、又汝与本尊渉入純汝純本尊、又互雑互行成有汝有本尊、汝与本尊眼耳等諸根六大之外無別体故、一一六大徹遍故、眼即耳乃至印即語意等也、本尊亦如此、所依屋宅乃至国土等亦然也、故別本

（一二左）

即身義云［異本③弘全四、二四頁・異本④同、四五頁・異本⑤同、六五頁］、問、自他身仏無碍相渉入者為彼此相和合雑乱而有、答、雖彼此相入而不相和合雑乱〈云云〉、生仏不二依正無碍等義以可知、問、上諸義偏為顕宗之談、何以故、一一義皆借不生性而成義、我宗事相為本更不可借性如何、答、上粗成此義了、汝若離性覓相如水外覓彼、今且由三力唯有以我功徳力、如来加持力、離法界力以一花一香、成広大仏事乎、又汝言不借不生理、汝以理〈胎〉智〈金〉不二之義非為最深秘密乎、又号事理倶密唯謂限真言一家、如汝愚人之執乃至外道之外不云離性有相也、速可改此

（一三右）

邪執矣、問、尓也、但離聞如上説見汝身唯見眼耳等身分更不見四法身等渉入無尽之徳相、如何、答、日先来照昏者不見之、以汝愚情執莫疑仏境界法、事事相即等義雖為一乗一家尊貴之法、以汝自他彼此分別凡眼設経百千年不可見無碍自在之徳相、可為汝眼境界、我皮裏肉見皮時更不見肉、況於四法身三種世間等渉入之徳乎、雖汝等身是酬以虚妄分別心而所作之業因遍計情有果報故虚假我依教理見汝、汝身以称不生性之六大為体、故約体約相皆遍法界身、故諸仏悉有汝身中以汝為体

（一三左）

本尊亦遍法界身故、汝亦有本尊身中以本尊為体也、上因達羅網重重義等此中可説、汝改二執心依教理以智恵眼信見汝身、汝若只以凡眼而見今時汝身顕四法身等隠、若飜此見四法身等徳相全不可為見凡、故四法身顕汝身隠、又凡聖隠顕差別故両所見倶顕倶隠、故隠隠不倶顕顕不並〈上如以𑖨字三義成無碍義〉、然隠顕顕隠同時無碍也、何以故、汝六大所成諸根〈乃至〉三密徳相、或隠或顕約汝六大所成諸根、汝即顕、約汝不生義汝即隠、本尊亦如此、約本尊六大所成諸根本尊顕、約本

尊六大不生義本尊隠、本尊与

（一四右）

汝或隠或顕如上、隠顕顕隠交輝汝与本尊齊頭顕現皆悉相容、無尽無尽、如因達羅網、即身頓成之義先而顕也、於此無碍義信見此知乃至証位、同以六大無碍義為所観故、信証同約不生為所縁之義辺生仏本来不二平等無初後新舊不同也、下三密加持義唯而説之、問、付渉入無碍等文、相対有無約隠顕等義成説、其名言義理等偏以華厳宗円融支分、豈莫顕密相乱之失乎、又於自宗以有無隠顕等義釈之有證據耶、如何、答、上粗如成、離顕家之名義独云何立真言之法相、雖其證非一、先三密六大等名

（一四左）

言非用世間之一二三等文字乎、又因達羅網者帝釈殿之網珠也、於彼網珠重重帝網義、汝若對判華厳宗別於其体深於渉入義、我更不遮之、又成隠顕顕隠等説者、既云三密加持速疾顕、故彼顕字何故言、顕者対隠云顕也、依三密加持法然具足三身之徳出現定可汝隠本尊顕、如此成隠顕顕隠終同時義也、是又汝成立有顕顕隠隠有有無無等同時无碍之深意者、我不必可執此名義等、又責証據足上速疾顕文等、於彼顕字委注解可有此等義於義文莫麁食、我宗不委釈譲先宗之義也、成此等義事誠

（一五右）

為管見不見儀軌本経之説相、自宗他宗之解釈、只付大日経疏並両三本即身義成其義也、具出一一文証成難破者、失今注解本意、是偏為愚昧初心者示修行用心故也、高才多智之人何待此等難破用不可随意矣、下義意皆准此可得意而已、次常瑜伽者、即身義云〈本法〉「弘全一、五一二頁」、常者不動不壊等義瑜伽者相応、相応渉入即是即身義〈云云〉、常瑜伽義可知、相応渉入上釈了、」次四種曼荼各不離者、四種曼荼羅者、一大曼荼羅、二三昧耶曼荼羅、三法曼荼羅、四羯磨曼荼羅也、即身

（一五左）

義云〈本〉「弘全一、五一二頁」、若依金剛頂経説、四種曼荼羅者、一大曼荼羅、謂一一仏菩薩相好身、又綵畫其形像名大曼荼羅、又以五相成本尊瑜伽、又名大智印、二三昧耶曼荼羅、即所持標幟刀鞘輪宝金剛蓮華等類是也、若畫其像亦是也、

又以二手和合発生金剛縛成印是、亦名三昧耶智印、三法曼荼羅、本尊種子真言、若其種子字各尽本尊位是、又法身三摩地及一切契經文義等皆是、亦名法智印、四羯磨曼荼羅即諸仏菩薩等種種儀事業等、若鑄若捏等亦是、亦名羯磨智印、如是四種曼荼羅四智印其数無量、一一量同虚

（一六右）

空、彼不離此、此不離彼、猶如虚空无碍不逆、故云四種曼荼羅各不離、不離即是即義〈云云〉、上六大是体、相応渉入義、今四種曼荼是相、相即義也、一一量同虚空者、同虚空義於上色心渉入処先而所見也、問、同虚空義雖聞先説愚昧尚難解、請重示之、答、且四種曼陀荼羅与空義相望、一往可成其義、一四種曼荼羅与空相違義、謂空中不可有四曼義、四曼前不可立空義、既四曼与空相違故互有互亡也、二不相碍義、四曼悉不生法為体、故不碍空、空亦真空故不妨有四曼、三四曼与空互相作義、色

（一六左）

即空還得有、空又即色方是可真空、然則四曼是真空之四曼、真空是四曼之真空也、无障无碍一一四曼同真空故量等虚空也、一一量同虚空故、彼不離此此不離彼等可知、問、空光無碍者、為空与光無碍喩為空光光光無碍喩、如何、答、古云、空与光無碍義也〈云云〉、今助一義謂以光光互無碍喩四曼不離義歟、上云四智印其数无量、一一量同虚空、以猶如空无碍者、誠雖以空与光無碍喩云猶如空光碍不逆結故四種曼荼羅不離者、一一量同虚空擧四曼各各不離所由也、今釈意成四種曼荼各々不離義故、一

（一七右）

一光量遍空而以光光彼此不離喩四曼各不離義也、思之、曼荼羅者翻云壇新譯云輪円具足、其名義広如四種曼荼羅義矣、」

三密加持速疾顕者、即身義云［弘全一、五一三頁］、〈本法〉、謂三密者、一身密、二語密、三心密、法仏三密甚深微細等覚十地不能見聞故曰密、一一尊等具刹塵三密、互相加入彼此摂持、衆生三密亦復如是、故名三密加持、若有真言行人観察此義、手作印契口誦真言心住三摩地、三密相応加持故早得大悉地〈云云〉、」秘蔵記云［弘全二、一八頁］、三平等観、先観本尊安置壇上、次観吾身

（一七左）

即印、語即真言、心即本尊、是三密平等平等遍法界、是名自三平等、吾三平等与本尊三平等同一縁相、是名他三平等、非只本尊与吾三平等同一縁相、已成未成一切諸仏三平等亦同一縁相、是名共三平等同一縁相、故真言印契等故引入諸仏於吾身中、是曰入我、引入吾身於諸仏身中、是曰我入、我入入我、故諸仏三无数劫中所修集功徳具足我身、又一切衆生身中本来自性理与吾及諸仏自性理等无差別、而衆生不知不覚輪廻生死、因茲為衆生発悲愍、我所修功徳自然成一切衆生所作功徳、是則真

（一八右）

言行者利他之行、真言行者当作手印誦真言乃至一切時恒作斯観〈云云〉、又云［弘全二、一四～一五頁］、将就念誦時三平等観、先観五大於身中、如五字厳身所説、吾遍法界身諸仏亦遍法界身、以吾身入諸仏身者吾帰命諸仏、以諸仏身入吾身者諸仏摂護於我、以吾口業入諸仏口業者吾以口業如実讃歎諸仏功徳、以諸仏口業入我口業者諸仏説法教授加持於我、以我意業実相理入諸仏意業実相理者、吾知諸仏心及吾自心、以諸仏意業実相理入吾意業実相理者、諸仏以観照門開示於我、已成如来従因向果、於其中間所修

（一八左）

功徳及浄煩悩成正覚、後度衆生利他功徳広大无辺、一仏功徳広大无辺、況無数如来功徳不可説不可説、以斯不可説不可説功徳入吾身者、開諸仏法界蔵以無量功徳施与於我、以吾本来所有功徳与此生所修功徳入諸仏身者吾供養諸仏、本尊三密鏡明如大円鏡智照一切色相、本尊与吾無二無別、吾三密鏡明如本尊三密鏡明、已成未成諸仏与吾無二無別、已成未成諸仏三密鏡明如吾三密鏡明、諸仏萬徳円満、眷屬囲遶、吾亦萬徳円満、眷屬囲遶諸仏遍法界身吾身在諸仏身中、吾身遍法界身

（一九右）

諸仏身在吾身中、譬如因陀羅網〈云云〉、」又云［弘全二、四〇～四一頁］、三平等以三密摂一切諸法、一切色摂身身即印契見色色也、一切聲摂口語、即真言聞音也、一切理摂心、心即本尊表実相、是三密平等平等遍一切処、是故行者常可思、一切所見境皆遍一切処身、一切所聞音皆是陀羅尼、即是諸仏説法音、又吾口所出音皆是誨他之音、教誨前人、是身語之下

理摂自心、心即実相、心即本尊、心即自心、如是観謂三平等、又行者将出道場之時、可思依悲願利他故出、又出後常可思、吾身本尊、足常踏蓮華、口常出音説法教誨

（一九左）

前人〈文〉、」上所引秘蔵記三平等観雖為広引行者三密所修之行殊至要故、忘繁所載也、文相分明、能能可留意耳、凡於今所引文三平等観義自他共並自他互平等、乃至以三密摂一切諸法観等、於其入門雖有少不同、本尊行者成入我我入義也、加持者、即身義云「弘全一、五一六頁」、表如来大悲与衆生信心、仏日之影現衆生心水曰加、行者心水能感仏日名持〈云云〉、然則以法仏三密加衆生三業云加、行者能住持之修行云持、今以日水影現義為喩、故獨且出於心也、速疾顕者、如上三密

（二〇右）

三平等入我我入等観、一一皆本尊行者、乃至一切衆生平等平等、促三世仏境於一座度無辺衆生於一心、既謂諸仏萬徳円満眷属囲遶吾亦万徳円満眷属囲遶、豈非両部諸尊為儔三身果位比肩乎、為誰此於勝解作意、法法自性皆如此、然則行者三密相応観察此義、成就本尊於己身、速疾之教益以如此、不可論成不成也、若勤修三平等観其益不虚云者、其益者、即是成仏之大益也、若雖一分許有得成仏益之義、以行者為即身成仏之人証故、於今即身義前後出速疾教益、更不出人證也、三密加持速疾顕

（二〇左）

義以可知之矣、」重重帝網名即身者、即身義云「弘全一、五一六頁」、是則挙譬喩以明諸尊刹塵三密円融無礙、帝網者、因陀羅網也、身者我身与仏身衆生身是名身、又有四種身、又有三種字印形是也、如是身縦横重重如鏡中像燈光渉入彼身即此身、此身即彼身、不同而同不異而異、乃至一而无量无量無量而一、終不雑乱故曰重重帝網名即身〈云云〉、重重無碍等義如解上六大無碍義中、更説之、問、今重重帝網句之下所注無碍義与六大無碍句之無碍義為有幾同異乎、答、六大無碍

（二一右）

者、就体成無碍義、重重帝網无碍等義皆悉具足也、結釈六大無碍常瑜伽頌文云「弘全一、五一二頁」、瑜伽者、飜云相応、相応渉入、即是即身成仏義〈云云〉、二頌八句之義即摂尽此一句也、何以知結即是即身成仏義故也、然下七句者転釈今句

也、第四句即結無碍義之頌故、於今重重帝網句下注无碍也、无碍義於四曼不離三密加持等句一一有之、即不離加持等者、是无碍義也、思之、」法然具足薩般若者、即身義云［弘全一、五一八頁］、言法然者、顕諸法自然如是〈云云〉、謂法而応然之処也、問、即身義［弘全一、五一七頁］引説

（二一左）

因非作者〈乃至〉悉離於因果並我覚本不生〈乃至〉遠離於因縁等文釈成法然義、尓者、遠離因縁性本自然限之為云法然、将於縁生法亦可有法然義乎、答、今所引我覚本不生等文者、即身義科判六大無碍等諸文已、次表謂六大者五大及識大云大日経所謂我覚本不生等、乃至引六大文証以六大為能生、以曰法身三種世間為所生、然則一切世間出世間法悉皆以六大和合因縁而所生也、其義粗成立畢、故我覚本不生文即為成立六大義之証拠、今又以此文釈法然具足義者、約六大相十界悉是六大

（二二右）

所生法、如上既成、約六大遠離因縁等義十界皆法然自尓也、然則法然是誰之法然起万法之法然也、縁起是誰之縁起、法然而因縁之像也、若此本不生智自然有、自体有方所言我能知法性者、万法天然衆生是実衆生、賢聖是実賢聖非修得非業報、然者諸仏非能化衆生非所他、無教化理不可有成仏義、故法然所具足薩般若智、離増益有離□減無離有无相遠離非二戯論〈染浄諸法准知之〉、是故引今我覚本不生悉離於因果等文、成立法然義、約遠離情所謂因縁本不生智云法然具足薩般若也、故本不生

（二三左）

之言即空増益有離余三謗也、乃至於自性所成眷属、金剛手等普門海会塵数諸尊、以四不生推求之、斯有即本不生悉遠離因縁也、若如汝之情執而実有与无相与性法尓天然而有之者、是云増益謗、然如云遠離於因縁悉離於因果等、即離情所謂実有実無執也、離此四句四義亦立、是故有本来本不生智〈有義立也〉此智性本自不生〈無義立也〉性相互立〈亦有亦無義立也〉相望非有無〈非有非無義立也〉、是故有諸仏有衆生能化所化断惑証理之道、本不生故皆立也、任汝之執有謂積集三十七尊乃至五億倶胝微塵数仏菩薩法尓住心

（二三右）

中、人腹豈能容受之乎、故仏法有无皆離四謗立四義也、汝設欲賞我宗六大四曼三密具徳法然本有義、任悉離於因果遠離於因縁等文言、不委其深旨、随已情執之分別、撥因果之理成法尓天然之義、恐反欲向外道自然之邪計乎、若又離四謗立四義等者、是顕宗之談也、何謂依用之、請離如上之義揀異于外道自性自然等、成立真言一家法然本有義、若与法印合誰又遮之、何況以三諦義四謗章等盛成立秘宗之義相、不遑毛挙而已、」心数心王過刹塵者、即身義云〈本〉［弘全一、五一八頁］、心王者法界体性

（二三左）

智等、心数者多一識〈文〉、即身義云〈三種〉［異本③弘全四、二六～二七頁・異本④同、四七頁・異本⑤同、六七～六八頁］、問、何物名心数亦名心王、答、於金剛界七十二尊者、毘盧舎那是心王、餘七十二尊是心数也、於胎蔵界會五百尊者、毘盧舎那是心王餘四百九十九尊名心数、問、尓者唯七十三尊亦五百尊也、如何云過刹塵、答、尊等各有十仏刹微塵数普門三昧眷屬故云過刹塵〈云云〉、別本即身義云［異本①弘全四、七～八頁］、問、五智分心王心所方何、答、法界体性智是心王、餘四智是心所也、問、諸宗皆以大円鏡智為心王、今何獨以之摂心所耶、答、宗法門中如是説故以大円鏡智摂心所、問、其證文何、答、菩提心論

（二四右）

云、於是印成法界体性智中流出四仏、故能出智為心王所出之智為心所〈文〉、」秘蔵記云［弘全二、四三頁］、釈迦即毘盧舎那、其心如何、答、譬如数穴闇屋燃燈之時、諸穴倶時放光、心王毘盧舎那成仏時无数心主同時成仏、是无数心主各各名別、各各垂迹樹下八相成道、然則釈迦是心王前心主釈迦之迹、乃至世間出現一切仏菩薩皆是各各心数之迹耳、雖帰本皆毘盧舎那拠三昧門各各三昧之化、是故各各名別、是一三昧所具余三昧如帝網之義〈文〉、問、心主者、通八識取之可云乎、答〈云云〉、凡立心王

（二四左）

心所諸教建立不同也、於小乗雖有二十部之別、通立六識心王、立心所事有開合不同、或部立受想思三、或部惣不立心所、

心王作用之外別無心所体〈云云〉、薩婆多立六識心王、四十六心所如常、法相宗立八識心王五十一心所、円教立心等縁起法界数量、以縁起法界為所縁、故能縁心之数量随無尽也〈云云〉、真言中又立無量心、即心数心王過刹塵等〈云云〉、雖有如此不同於何教以八識通名心王常途性相也、而三種即身義［異本③弘全四、一六頁・異本④同、四七頁・異本⑤同、六七頁］毘盧舎那心王余尊心数〈云云〉、別本即身義法界諸性智為心王余四智云心数、今此心王

（二五右）

心数建立即非常途説相、既転八識得四智、五智皆是応心王、故十住心論云［巻一〇、弘全一、四〇〇頁］、五仏則心王、余尊則心数〈云云〉、然即身義並秘蔵記心主釈迦之迹等之文意、主伴相対且以為主云心王以為伴云心数也、顕家以大円鏡智為能現余三智為所現、秘家法界体性智為能現余四智為所現、故以能現主云心王下所現且云心数歟、秘蔵記数穴闇屋燃燈之喩者、以一切心数喩毘盧舎那心王各各三昧門之化也、故帰本唯是多一識也、然則今心王心数建立非常途性相也、能能思之、

（二五左）

各具五智無際智者、即身義云〈本〉［弘全一、五一八頁］、各具五智者明一一心王心数各各有之、無際智者、高無数之義〈文〉、秘蔵記云［弘全二、八～九頁］、五智謂一法界体性智、三密差別、数過刹塵、名之法界、諸法所依故曰体也、法然不壊、故名為性、決断分明得以為智、二大円鏡智、謂自他三密無有遍際、名六大也、具足不欠曰円、実智高懸万像影現鏡之喩也、三平等性智、清浄智水不簡情非情故、彼此同如故、常住不変故、名曰平等性智、四妙観察智、五眼高臨邪正不謬因以為名、五成所作智、二利応作故曰所作、妙業必遂成之称也〈文〉、

（二六右）

又云［弘全二、一〇頁］、以水喩五智如何、水性澄寂一切色相顕喩大円鏡智、一切万像影現其水無高無下平等喩平等性智、其中水一切色相差別明了現見、喩妙観察智、其水無処不遍喩法界体性智、一切情非情類依水得滋長喩成所作智〈文〉、五智之義如文易知、無際智者、如即身義、問云、各具五智明一一心王心数各有之、尓者心数具五智時、以心数為王将心数為主以心王為伴、如何、答、約体約相二義互倶有之、有何失乎、上心王心数義、准以可知之、」円鏡力故実覚智〈文〉、即身

義云〈本〉[弘全一、五一八頁]、一切諸仏因何得

（二六左）

覚智名、謂如一切色像悉現高臺明鏡之中、如来心鏡亦復如是、円明心鏡高懸法界頂、寂照一切不倒不謬、如是円鏡何仏不有、故曰円鏡力故実覚智〈文〉、其義可知、又即身義云三種[異本③弘全四、二九～三五頁・異本④同、五〇～五五頁・異本⑤同、七〇～七六頁]、問、頌文云円鏡力故実覚智者其意如何、答、此頌意正成仏、問、如何正成仏、答、如実知自心名正成仏故云円鏡力故実覚智、問、如何如実知自心耶、答、真言行者修行三密得成就時、如実具自心本有荘厳蔵、名如実知自心、問、其自心本有荘厳蔵者何物、答、本覚四種曼荼羅也、問、此本覚四種曼荼羅逕幾劫数得見、答、此宗意随

（二七右）

真言行者修練成就一生得見之、問、尓者行者成就之時得見本覚曼荼羅名正成仏耶、答、尓也、問、若尓違法然具足薩般若名即身成仏、答、於即身成仏有三、一理具、二加持、三顕証、彼法然具足薩般若者約理具云即身成仏也、此円鏡力故実覚智者約顕證云即身成仏、所以不違、問、成仏極難故菩薩經三無数劫方登妙覚、此宗修何観早得成仏耶、答、修行諸波羅蜜門者、必逕于三無数劫方登覚位、今真言行者依於月輪作字母観、早得大菩提也、問、此宗意云即身成仏者、以断煩悩即身成仏、若不断煩悩即身成仏耶、

（二七左）

答、宗意不断煩悩而即身成仏、問、断障成仏者是經論明文、今如何云不断煩悩而即身成仏、答、此宗意云悟煩悩即菩提故即身成仏、問、如何煩悩即菩提、答、煩悩本性既是菩提〈等、云云、更勘〉、問、尓者不断煩悩即身成仏者、違諸教断障成仏、又彼真言教云以金剛断障耶、答、此宗煩悩転帰明名為断障、不謂断捨煩悩体、問、何故不断捨耶、答、若不煩悩即菩提可断捨之、煩悩即菩提故不断捨帰真、所以仁王経云、菩薩未成仏時以菩提為煩悩、菩薩成仏時以煩悩為菩提〈云云〉、問、云何此義、答、於一物随迷悟云煩悩、又云菩

（二八右）

提、是不異体物尓可云、大衍論云、以覚本源故名究竟、不覚本源故非究竟、真言行者印身成仏者、何物為因何物為根何物

為究竟耶、答、菩提心為因大悲為根方便為究竟也、問、其菩提心者何物、悲及方便何物、答、菩提心者白淨信心義也、悲者具大慈之大悲也、方便者即醍醐妙果三密之源也、問、何故菩提心為因慈悲為根方便為究竟、答、出過一切戯論如淨虚空、於内證所行得深信薩般若心堅固不動、離業受生成真性生、萬行功徳従此増長、故菩提心為因、由自善根及與如来法界加持、所為萬行妙

（二八左）

業普於一切智地乃至無餘有情界皆悉生根、故云慈悲為根、即彼萬行所成一切智智之果名為方便、問、其白淨信心義為菩提心者、何時白淨信心、其所為萬行妙業如何生慈悲根、萬行所成一切智智之果是菩提、如何名方便、答、白淨信心者、得観我身中本有阿字并月輪名白淨信心也、以無住心所万行即由大悲地界所執持故、大悲火界所温育故、大悲水界所滋潤故、大悲風界所開発生故、大悲虚空無障礙故、無量度門任運開発、由如牙［芽］莖枝葉次第荘厳、如是大慈悲萬行所成一切智智之果、内具方便故起

（二九右）

利他方便業、所以菩提名方便、問、如何観阿字并月輪為白淨、又萬行所成一切智智之果、為本有果為今有果、答、生決定誓願、一向志求一切智智心、當普度法界衆生者、由自心本有𑖀字并月輪加持力也、所以観阿字月輪名白淨信心也、憐愍之心徹於骨髄、諸有所作皆為建立衆生、必使成就無尽法界之樂度脱無餘衆生之苦、名慈悲也、萬行所成一切智智之果者本有之果不始有也、問、此之因根究竟三種、為次第而起為同時相応、答、若約能求之心次第生起、若約所求之心者因果同時不前

（二九左）

後次第也、問、何故尓耶答、真言行者初入輪壇、開真淨菩提心、発三密萬行、顕得本有菩提故、約能求心前後次第生起顕證、雖尓此菩提心為行果法然具足於我身故、約所求同時具足也、問、為何行究竟即身成仏、答、如実知自心、是云究竟即身成仏、故頌文云円鏡力故実覚智也、問、何如実知自心、答、見諸法本不生際名如実知自心、問、如何見諸法本不生際名如実知自心、答、見衆生究竟是仏、名見諸法本不生際、是則如実知自心也、問、見衆生究竟是仏、如何答、悟衆生自心即

是一切智智、而如実覚知自心本有秘

（三〇右）

密荘厳蔵、云見衆生究竟是仏、問、如何如実覚知自心本有秘密荘厳蔵、答、真言行者真語為門、自心発生菩提即心具萬行、見心正等覚證心大涅槃、発起心方便厳浄心仏国、以無所住而住其心、是名一切知者一切見者等、故云如実覚知自心本有秘密荘厳蔵、問、其自心本有秘密荘厳蔵者是何物、答、是本有四法身也〈云云〉、」為遮自暗昧具載之者、無厭繁矣、我且成問、汝又答之、三種即身成仏汝依何教証立之乎、答、今即身義文是其証也、問、其顕得成仏者指如実知自心名

（三〇左）

究竟成仏耶、答、然也、問、所云顕得成仏為限究竟果満位将可通因位耶、答、古来定顕得成仏異義〈云云〉、且先出一義、有人云、問、何位得三種即身成仏、答、理具従凡至仏、加持浄菩提心乃至仏果、顕得唯果位、或同加持〈云云〉、若尓此解為正耶、答、唯在果位此解為勝、所以然者、浄心菩提三密修行未究竟已、何況疏云「大日経疏巻一、大正三九、五七九頁中」是故此教諸菩薩真語為門自心発菩提心〈乃至〉厳浄心仏国〈云云、如上〉此釈意者自心等四句如次四種阿字、発起等二句第五長声悪字、即身義意五字究竟以為顕得、而浄心、初字五字未具不足為顕得故

（三一右）

也〈云云〉、問、所出自心発菩提等疏文為釈何義文耶、答、疏第一住心品釈住心義文也、問、浄心初字五字未具〈云云〉、尓者真言住心相唯限𑖀字一字為不通五字義耶、答、有人釈意尓也、問、知諸法本不生際為𑖀字義耶、答尓也、問、如実知自心者、又為𑖀字義耶、答、上所引即身義云「異本③弘全四、三四頁・異本④同、五五頁・異本⑤同、七五頁」、見諸法本不生際云如実知自心〈云云〉、尓可為阿字義也、問、若以知此本不生際為究竟即身成仏耶、答、即身義云「異本③弘全四、三四頁・異本④同、五五頁・異本⑤同、七五頁」、如実知自心是云究竟即身成仏、故頌文云、円鏡力故実覚智〈云云〉、問、尓者如実知𑖀字不生義為究竟即身成仏何云浄心初字五

（三一左）

字未具不足為顕得乎、答、真言一家以即身成仏為規模顕得義、若限最初浄心者、顕家初発心時便成正覚義有何差異乎、故

顕得唯果位是古来義、我足信受也、内非遮汝之信受破文得理誰不信之、問、浄心初字五字未具者、以五點配五仏時阿閦尊為不具五智耶、答、何不具之乎、問、尓者於浄心初字不具五點云義如何、答、雖聞此難顕得成仏設許通浄菩提心、猶唯仏果位義為勝、若不尓何謂究竟成仏乎、此疑心更所不晴也、請止反語示此等義、答、雖為顕得成仏、古来難決誠成一義、後学更刊定、於上此自心

（三二右）

発菩提等文会𑖀字五點義有因行証入具足証入具足方便究竟成仏等義也、謂此五字義転釈最初𑖀字不生智行相也、自心発菩提者、発𑖀字不生信智也、発此不生智者、一切所作心無着相故此云浄心菩提、以此無住心所修慈悲行、不生智上徳故云即身具万行、即心者、即指上自心、所以即字皆通下心也、然見此不生際如実知自心即心成等正覚也、心合不生性寂静安楽、故即心証大涅槃心具上不生向徳、故発起方便憐愍之心徹骨髄建立衆生也、此不生性即智所依所住、即心厳浄仏国也、以具此五字心為入

（三二左）

真言門住心之相也、若浄心義限初𑖀字不生一義者、何異顕家覚自心本不生一性空寂之義乎、我宗意終発一念不生心具此五點義也、然則真言修行軌則、以此五字義為終之体也、疏云〔大日経疏巻一、大正三九、五九〇頁上〕、今此宗直以浄菩提心為門、若入此門即是初入一切如来境界、当知行人則是位同大覚也〈云云〉、是則於𑖀字不生義具因根究竟、故浄心顕現位同大覚也、不尓豈真言不生之一念、超勝顕家一念成仏義乎、真言無所住心是三密平等之中意業故、次具縁品以後説作壇曼荼羅印真言等令誦五字明結五智契印等

（三三右）

更加法仏三密父母所生身令証大覚位也、非唯成自正覚依𑖀𑖀加持忽変穢土草庵成浄仏刹、顕家意於初地已上不同有浄治地法義也、問、尓何以三密加持等文不成顕得成仏之義、唯付釈住心文立此義耶、答、釈円鏡力故実覚智句故、約如実知自心釈成究竟成仏義也、問、尓者何故独付円鏡智成顕得成仏義乎、答、挙初発菩提心智摂後也、何以知、云各具五智無際智故、豈唯限円鏡智力立成仏義乎、或云、本尊与行者自他三密顕得義、約大円鏡智有所由也、如下成、問、尓者上三密加持速疾

之顕字与以

（三三左）

円鏡力故句配顕得成仏之顕字為同為異如何、答、同異有何失乎、若云同以上一頌四句配加持成仏以末後一句為顕得成仏、故可有差異也、若云異由三密加持自身本有三部諸尊、速疾顕発云加持成仏、非三密加持顕発之功者、何有顕得成仏乎、尓与速疾顕発得義有何別乎、答、如所難所由二俱無失也、問、顕得成仏者、因果為同時相応為次第而起耶、答、上所引即身義自問答云〔異本③弘全四、三三～三四頁・異本④同、五四～五五頁・異本⑤同、七四～七五頁〕、問、因根究竟三種為次第而起為同時相応、答、約若能求之心次第生起、若約所求心者、因果同時、不前後次第也、問、何故尓耶、答、

（三四右）

真言行者初入輪壇、開真浄菩提心発三密万行顕得本有菩提、故約能求心、前後次第生起、顕証、雖尓此菩提心為行果法然具足於我身、約所求同時具足也〈云云〉、初入輪壇開浄菩提心者、逢灌頂阿闍梨入曼荼羅壇、初見海会諸尊是開真浄菩提心也、次当得若于三昧耶、若干陀羅尼門等是発三密万行終顕得本有菩提也、此菩提心為行果法然具足於我身者、此菩提心是指浄菩提心也、為行果者、初地所得浄菩提心為三賢一僧祇劫福智行之果也、〈此且約常途位地成説疏家越百六十心云初知菩提性也〉、又云、真浄菩提心者、是

（三四左）

本有菩提故発三密万行所顕得本有菩提果者是為真浄菩提心也、故云此菩提心為行果、後解為勝、謂約因根究竟之心以浄心菩提雖為因句望法然本有果徳発三密万行具足大慈方便所得為菩提果也、何以故、浄心菩提者、是発阿耨多羅三藐三菩提心也、既発無上正等覚心故還為大慈悲方便行之果也、約能求前後次第生起顕証等者、約因根究竟次第以初地浄菩提心初法明門為因句、自二地至七地為根句、八地已上為究竟句也、故望因人次第顕証義、於十六大生雖有前後次第生起、約法

（三五右）

然本有所求果徳十六大生同時具足、故前後次第終因人昇進之説、同時具足是法然本有之談也、以金薩配因果義深思之、如下成、故於因果前後与同時具足也、雖然欲引凡仏語同時不出、文字有次第也、有因果義有成仏言、又有前有後、又有前後

次第之生起、有同時具足平等平等義也、若亡因無果闕前無後、又無前後無同時義矣、而前後差別皆凡天業行之建立、同時具足是本有菩提之智眼也、衆生無尽故、法性法然故、前後与同時時而無離、重重無尽無尽如因陀羅網、於中随能見機根謂前後説

（三五左）

同時也、無執一隅、縦雖究竟果満位関汝之執前次第生起顕証義有初後不同、故還不可為最成、於最初発心位信受同時具足無尽徳相、如実覚知自心故以可為究竟成仏也、汝只閉両目成九思而已、上所引即身義云［異本③弘全四、三二頁・異本④同、五二頁・異本⑤同、七三頁］、問、真言行者即身成仏者、何物為因何物為根何物為究竟耶、答、菩提心為因等〈云云〉、乃至菩提心者、白浄信心、白浄信心者、得観我身中本有、阿字並月輪名白浄信心也〈云云〉、又云［異本③弘全四、三四頁・異本④同、五五頁・異本⑤同、七五頁］、問、為何究竟即身成仏、答、如実知自心是究竟即身成仏、故頌文云円鏡力故実覚智也、問、何如実知自心、答、見諸法

（三六右）

不本生際云如実知自心、問、如何見諸法本不生際名如実知自心、答、見衆生究竟是仏名見諸法本不生際〈云云〉、広如上、是等文意明於浄菩提心位判顕得義也、然現世証得歓喜地後十六生成正覚文誠足為規模、以至薩埵位者皆可為即身成仏人也、於初地具十六心云義有深旨也、約竪前後次第生起顕証、約所求同時具足、謂於円鏡智中、自他三密鎔融含摂、故名壊凡挙体是為本尊、然始覚菩提心生初信三密功徳〈十信也〉、金剛種性漸顕発〈十住也〉、起三密行〈十行也〉、此行流至三処〈十廻向也〉、終如実覚知秘密荘

（三六左）

厳蔵〈十地也〉、是約常途位成説、真言意以十地名信解行地、即寄三乗証位立因根究竟二心也、十地者為十信三賢之行証位故合信解行以名信解行地、信智具足大悲万行斉備増修増長、故亦名到於修行地、故真言位地多寄三乗証位顕秘宗頓成旨也、如下説、然則寄初地証真建立薩埵位故、以円鏡力故実覚智之句配顕得成仏、且依顕宗説於初地初得平等性智並円鏡智一分時、約見法本不生際以如実知自心名浄菩提心也、又云、見諸法本不生際者、見衆生究竟是仏〈云云〉、是又平等性智

彼此

（三七右）

同如、故与衆生本来無二平等、円鏡智力故、自他三密無有辺際、故衆生是仏也、三密加持故此本有菩提速疾顕発之行者与本尊重重如帝網名即身也、即身義以円鏡力故句出成仏所由者有深意也、顕得成仏義惟既顕、又約汝等所修両部大法有即身成仏義者、初心雖未証知三密平等義、若有正見正信其心自順三密五相瑜伽故、所順境上義亦能順心上具足也、如彼加行無念観等准知之、大日経三三昧耶品云〔大日経巻六、大正一八、四二頁中〕、仏言、有二種法相続除障相応生名三三昧耶、云何彼法相続生、所謂初心不観自性、従此

（三七左）

発慧、如実智生、離無尽分別網、是名第二心菩提相、無分別正覚句、秘密主、彼如実見已、観察無尽衆生界、悲自在転、無縁観、菩提心生、所謂離一切戯論安置衆生、皆令住於無相菩提、是名三三昧耶句〈已上、経文〉、同経疏釈云〔大日経疏巻一九、大正三九、七七七頁中〕、此三中、最初但能発心誓欲成仏、然未能正観如来功徳、不能了知以何法而得成仏、未能具有観照之慧、但有求仏之心、而未能了達自己身之本性有何功徳、但有此慧性能於生死中最初発心、而求仏果、此是初三昧耶也、従此心後得如実智生、謂能以慧決擇、了知此是功徳此非功徳等、是処非

（三八右）

処邪正之相、以得如実智故、能離無尽分別妄見之網、善滅諸戯論安住真実相中、然此実智即是菩提心、三昧耶是等義、然此心等発名三昧耶也、初心雖未具実智、然亦誓成仏度人、即是等心、故亦得三昧耶名也、従此心第二心相続、无間無障故、次即於此真実句中、了真假已、於一切無尽衆生、而起大悲心、是第三三昧耶也〈云云〉、第一三昧耶所謂初心不観自性等者、其行相尤浅〈云云〉、此三昧耶之初発心、当住心品菩提心為因句也、但住心品等並上所引即身義菩提心為

（三八左）

因大悲為根方便為究竟也、是初菩提心、第二智、第三大悲也、第二、第三前後具如疏文、初心雖未具実智、然亦誓成仏度人、即是等心故亦得三昧耶名也〈云云〉、此亦如是雖未証得如実知自心義、其心相順本不生際、故於汝之正見不生信智根

究竟二心等生名之加行即身成仏、雖此非必自覚悟以有根究竟心故、又非無顕得義也、設雖似有覚悟与邪見相応違不生真智、故不可有成仏義、縦雖似蒙昧与正見相応、起一念信智相順即身頓成教得無辺功徳也、如彼聞裁打声開功於刀杖、三密五相観念、皆応推功於仏功徳、故所引両本即身成仏義

（三九右）

素意、非別約人機説、惣望教益成説也、能能思之、正像末三時多約証行興廃説、然仏説大綱正為兼為等五為、皆為本意、三密修行軌儀等、悉皆成果道故、而汝以即身頓成義固欲非我等之分、故擎成仏言還責利衰毀誉称議苦楽等得情意一種否、今此金剛一乗甚深之教益、設雖不生解而能信受之、於初三昧耶以成堅種也、雖未能了達三密三平等義有何功徳、聞三等義有愛楽心故、有愛楽心似三等教心也、若不似豈願楽之乎、起此三等心事、何強為難、雖末代辺地有堅固道心能分別邪正発大悲心情

（三九左）

物人非無之、此三等心等相続何又無根究竟義乎、又以此三等心師資相対、於三密三平等義成等義、金薩等大日、龍猛等金薩、龍智等龍猛、乃至高祖等恵果、乃至汝等師、此三密行自誰処為不三等行哉、自大日如来二十余代、師資相隔於我等処、雖有余過修三密行、有三等義、以汝等謂等仏、於教建立与汝所行有何疵乎、汝若誹撥三密平等之功徳不我分云者、実汝為非即身成仏人、即身頓成教既不汝分故、又自大日如来所伝来三等義無之故、若於我等処許三密三平等行、雖送二千星霜隔万里煙彼開

（四〇右）

鉄塔昔与望道場今、仏与我三等義、於所伝両部大法無中間相雑物也、故縦我等三密三平等行雖徴劣、三平等故我等一定有等仏義也、有等仏分故、汝云即身成仏人有何苦乎、問、我顧機下劣、為顕教深奥、即身成仏謂不我等分、汝過分即身成仏、雖談顕成旨、出堂場又起貪嗔癡等、故成仏言以戯論、誰信受之、我元非謂於三密教都無利益也、唯今所論者、如我等者、修行此教有即身成仏義否也、答、許有於三密三平等行、即身頓成深旨、若以得三密加持人等仏云者、即凡則見仏、是重重帝網義也、若亡行

（四〇左）

者唯成仏身、対何有重重帝網義乎、頂聞三密平等教、懐等果位喜、何徒論顕家超勝之差異、空欲譲教益於上根上智〈尓乃義〉乎、汝等既労即身成仏人証、其上根上智者為誰人乎、是偏依催我法分別之凡心疎三密平等観念、唯以眼耳転受欲為仏故也、如華厳経云［八十華厳巻三五、大正一〇、一八七頁上］、設求於離心下劣、捨於最上仏智恵〈云云〉、汝等有此過、於今時三密頓成法、惟已無主、奈何奈何、汝雖似有欲高我宗之志、不顧於末世無益之難、若於初三昧耶未萌不可有三等心、無三等心者我於汝不可関根究竟三平等義、尓実何有成仏義乎、顕宗信位尚有成仏号、於秘教信心何強削欲成仏言乎、広如下成矣

註

① 明恵門下および高山寺における教学展開については納富常天「高山寺教学の展開―丹州神尾山寺を中心として―」（『金澤文庫資料の研究―稀観資料篇―』一九九五）、同「解説―高信編『解脱門義聴集記』―」（『金沢文庫研究紀要』四）土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統―講説聞書と伝授聞書とをめぐって―」（『訓点語と訓点資料』九五、一九九五）参照。

② 石井教道「厳密の始祖高弁」（『大正大学学報』三、一九二八、後『明恵上人と高山寺』に所収）等参照。

③ 前掲納富常天氏論文（一九九五）五六頁。

④ 『六大無碍義抄』に注目した最新の研究として、末木文美士氏による「高信『六大無碍義抄』にみえる明恵の語」（『高山寺典籍文書調査団報告論集』二〇〇六・三所収）がある。末木氏は、本書にみえる明恵の口説の引用例を指摘し、今後の研究の重要性を示唆しており、極めて重要な指摘と思われる。

⑤ 拙稿「順性房高信と頼瑜―頼瑜教学に与えた高山寺系密教学の影響―」（『印度学仏教学研究』五三、二〇〇七刊行予定）参照。

⑥ 村上素道『栂尾開山明恵上人』所収、三三五頁

⑦ 『金澤文庫資料の研究―稀観資料篇―』（一九九五、五五五頁）

⑧ 高信の年譜については前掲納富常天氏論文（一九九五）参照。

⑨ 前掲納富常天氏論文（一九九五）五五頁。

⑩ 以下に、京都大学附属図書館蔵本の書誌について記す。

京都大学附属図書館蔵本（日蔵／未刊／四〇五）　外題：六大無碍義抄弐巻　内題：六大無碍義抄　巻上
法量：紙数〉四〇紙（巻上）、三七紙（巻下）一葉〉一〇-一一行　一行〉二〇字　縦〉二四・三cm横。一六・五cm　字面〉一八・五cm
備考：大正十四年一月二十九日の蔵書印　上巻一紙目右余白に「高山寺本密□院本」とある。

⑪ 本写本に関しては、奥書の翻刻と簡略な法量などが『真福寺善本目録』続輯（黒板勝美編、一九三六）に記載されている。

⑫ 以下に、筆者が調査した書誌的事項について記す。

外題：六大無碍義　下　第七十三□　内題：六大無碍義抄　巻下　尾題：下　装幀：写本（巻子装）、表紙有（後補）、紐・軸欠　料紙：楮紙　裏打：無　法量：縦二八・一cm、横五二・八cm、一紙三五行、二九字詰　界：無　訓点：黒点（返り点）
備考：首題右横に「外題如内題也」と墨書（本文と同筆か）／紙背文書あり（『金光明最勝王経』巻第五「蓮華喩讃品第七」の書写）

⑬ 『義抄』と頼瑜教学との関係については前掲拙稿参照。

⑭ 我宗成三密行故、現汝見我国雖為小国仏法東漸七百余歳、大蔵経本六千余巻、諸宗章疏八宗余家、流行一天学者並肩。而上自一人下至万民祈求現当二世速疾之益時、先崇敬我宗。而末代小国規儀是疎、信心亦微戒行不全、練行功少故、疑可謂有何所益。雖然甘雨潤四悔誚灾満万戸。嗚呼愚哉、内有本始両覚、外具足三密加持故二我迷酔之窓、内霊験尚掲焉也。況於持戒精進之者乎。（京大本、三一右）

⑮ 高信は本書の注釈態度について「成二此等義一事誠為二管見一不レ見二儀軌本経之説相自宗他宗之解釈一、只付二大日経疏並両三本即身義一成二其義一也」（上巻、一四頁左）として、三種の『異本即身義』を中心とすると述べている。

⑯ 京大本、下巻一七左

⑰ 京大本、上巻三右

⑱ 苫米地誠一「明恵房高弁作『阿字観』をめぐって」（『仏教教育・人間の研究』斉藤昭俊教授古稀記念論文集、二〇〇一）

⑲ 土宜成雄『玄証阿闍梨の研究』（一九四三）

⑳ 大正四五、五八五頁下

㉑ 続蔵一、一四・一五四右上

㉒ 大正四五、七七三頁中

㉓ 前掲末木氏論文参照。

㉔ 現段階では以下の二例が検出された。①『義抄』「凡三密行門、自初心十地位修行也。其意業住不生之理…」（下巻、一五丁左―一七頁右）／『解脱門義聴集記』「凡位ノ中ニ於テ…其意業ニ空ノ理ニ住スルハ…」（『金沢文庫研究紀要』四、一三頁）②『義抄』「先顕家五位修行階降者…」（下巻、九右―一一右）／「凡ソ五位修行ノ階降ト云ハ」（『金沢文庫研究紀要』四、八―九頁）

㉕ 宝治元年〈丁未〉五月十日、晩陰於丹州神尾山北谷遺教台之禅庵類集記之。依有種々違縁首尾遂十二ヶ年了病体于今存終其功可悦可哀矣。（『金沢文庫研究紀要』四、一八六頁）

㉖ なお本書では明恵の口説に関連して、明恵が紀州において行なった仏眼法による奇瑞についても触れられているが（京大本、下巻三一左）、これは高信が関わった『明恵上人行状』（漢文行状）建仁元年夏の記事を典拠としたものであろう（『明恵上人資料』一、一一一頁）。

㉗ 高信は上巻（五右）において、真言行者が三密行を成就するために要する三力（我功徳力・加持力・法界力）について、法界力は「一花一香遍満法界無碍自在」であるから「事事無碍法界」の立場に当たるとし、順に五大事相を「事法界」、五大不生の理を「理法界」、五大理事無碍の関係を「事理無碍法界」であると述べて、華厳教学における四法界説に配釈している（前掲拙稿参照）。

㉘ 明恵の密教思想については、前川健一「明恵の教判説」（『東洋哲学研究所紀要』一四、一九九八）、拙稿「明恵の顕密観―五秘密与五聖同体説を中心に―」（『印度学仏教学研究』五四・二、二〇〇六）参照。